

人類愛と芸術に生きた ロマン・ロラン (II)

島野 盛郎

ブルゴーニュを愛した作家たち (4)

19世紀の終わりから20世紀前半にかけて世界文学史上に輝かしい金字塔を樹立したのはロマン・ロラン (Romain Rolland) であった。

ノーベル文学賞を受賞した『ジャン・クリストフ』と『魅せられたる魂』は、いわゆる大河小説の先駆をなした作品であり、歴史の意識と社会的関心を文学のなかに導入する画期的な作品となった。

しかし、ロランの真価はこの二つの作品によってのみ評価されるべきではない。『ペートルヴェンの生涯』(1903)にはじまる数々の伝記、『ダントン』(1898)、『7月14日』(1902)、『愛と死の戯れ』(1925)に代表される戯曲、『クレランポー』(1920)、『ピエールとリュース』(1920)などの反戦小説、陽気なブルゴーニュ魂を描いた『コラ・ブルニョン』(1919)、すぐれた音楽評論などなど不朽の作品がほかにも多数残っているからである。

元来、体質的には音楽家、素質においては歴史家、その感情は詩人であるといわれる偉大なロマン・ロランを前回に続いて紹介することとする。

67歳で再婚

ロランは第二の長編『魅せられたる魂』をスイスで11年の年月をかけて1933年に書き上げた。すでに67歳になっていた。だが、その翌1934年には、亡命ロシア人マリー・クーダチェワと二度目の結婚をした。彼女とはその数年前から文通をしていた。ロランの作品に傾倒している彼女の純粋な手紙はロランを感動させ続け、ついに結ばれたのである。彼女は結婚後もロランに誠実な愛を捧げるとともに、彼の仕事に助力を惜しまなかった。かくて長い孤独の生活から解放されたロランに喜びと力とがよみがえってきた。この頃は人民戦線運動の絶頂期でもあり、ロランにとってはローマ留学時代とともに幸福な季節であった。

こうしているうち、長年住んでいたスイスから愛する祖国フランスで余生を送りたい気持ちになっていった。

ナチズムやファシズムが中立国スイスをさええ侵しはじめ、「精神の自由な空気がしだいに吸えなくなってきた」からでもあった。

1938年、ブルゴーニュの生まれ故郷クラムシ

ーに近いヴェズレーに居を構えた。

ヴェズレーはその昔、スペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラに通じる巡礼の道の基点の一つである。マドレーヌ寺院を中心に古い造りの家々が寄り添うように建ち並んだ丘陵の美しい町である。今も中世の雰囲気静かに伝えており、ロランが住んだ家も残っている。4年前、筆者はヴェズレーのロランの家を訪ねたとき、ここが偉大な魂が長い生涯を終えたところかとの感慨で胸が一杯になった(写真)。

ロランがこの家に住んだのは、7年間である。ここに移った翌1939年、第二次世界大戦が勃発し、まもなくヴェズレーの平和な丘もドイツ軍に占領された。彼は発言の自由を奪われたので、静かにペートルヴェン研究や親友シャルル・ペギーの伝記を書き進めた。

本来ならロランは頑強にナチ・ドイツに抵抗してきたのだから、逮捕はまぬがれられないはずであった。奇跡的に逮捕をまぬがれたのは、ロランの作品を愛読した一ドイツ将校の配慮があったからだという。

ヴェズレーに住むようになってから、ロランはしだいに体のあちこちが悪くなっていった。心臓が弱り、視力が衰え、息切れのため歩くのも困難なほどになった。しかし、「光が与えられている間は」と執筆に余念がなかった。レジスタンスの若者たちからも目を離さなかった。この頃の日記に「私は人類の理想に忠実であり続けた。たとえ私個人が倒れても、この理想は再び立ち上がるであろう」と書き綴っている。

1944年8月下旬、パリは解放され、全フランスに自由と歓喜がよみがえった。ロランは同年11月7日、病気の診断を受けパリに行った。そしてソビエト大使館の革命記念祝賀会に出席することができた。ヴェズレーに戻るとレジスタンスの犠牲者追悼会(12月9日)のためのメッセージを送った。それが最後の文章となった。それから三週間目の12月30日、ロランは78年の人生を静かに閉じたからである。

彼の偉大な遺業をしのぶ人びとは、彼の遺骸をパリのバンテオン(英雄・偉人をまつた寺院)に収めようとしたが、彼の遺言によって生まれ故郷クラムシに近いブレーブの、祖先が眠っているささやかな墓地の片隅に葬られた。つまりブルゴーニュに生まれ、ブルゴーニュに眠っ



1912年頃のロマン・ロラン (パリ・モンパルナスにて)

たのである。

ロランがブルゴーニュを描いた作品に『コラ・ブルニョン』(1919)がある。これは昔からのブルゴーニュの人びと特有の楽観主義を好意にみちて綴ったものである。常に悲劇的なあるいは英雄的なテーマを扱っている彼の作品の中では、まさに異色であるが、ロランの魂の奥底には祖先伝来のブルゴーニュ魂がひそんでいることを表現している。

シュテファン・ツヴァイクはこの作品を「ロマン・ロランの諧謔風の傑作」と評している。『ジャン・クリストフ』という大著完成に疲れたロランの心から、ほっと流れ出た故郷を想う自然の音楽とでもいうべきものである。なかで彼はクラムシーをつぎのように誇らかに歌っている。

“クラムシーの町、名高い町、
川のほとりにみこしをすえて、
一方にはよいぶどう酒、
他方には牧場、

まわりの畑だけで一国の値打ちだ”

またつぎのようにも述べている。

“美しい反映となだらかな丘の町……
お前の回りに、巢の藁のように編まれて、
耕やかされた丘の斜面のやさしげな線が巻
きついている。
樹々の茂る山々の長々とのびる波が、
やわらかに起伏して、
はるか遠くは青味がかり……
まるで海のような。……
潮の波がしらの上、
はるかに遠く、ヴェズレーのマドレーヌ寺院が、
その帆柱をそびえ立たせている。
そしてすぐ近く、
うねうねしたヨンヌ川の曲がり角には、
パセルヴィルの大岩が茂みのあいだに、
その猪の牙を突き出している”

すぐれた伝記作家

最後にロマン・ロランの伝記について触れることにする。1903年、ロランは親友シャルル・ペギーの編集する『半月手帳』に『ペートルヴェ



ヴェズレーの鳥観

『ヴェズレーの鳥観』を発表した。これが伝記の第一作で、以後『ミケランジェロの生涯』、『トルストイの生涯』、『マハトマ・ガンジー』、『ラマクリシナの生涯』、『ヴィヴェカーナンダの生涯』、『シャルル・ペギー』などを発表している。ペートル・ヴェン、ミケランジェロ、トルストイの伝記がロランの三大伝記といわれているが、他の諸作もそれらにまさるとも劣らない水準にある。いずれも人類の苦悩を背負いながら真実のために苦闘した精神的英雄に対するロランの感激の賛歌である。ロランはこれら精神的英雄の息吹きを吸って、物質的な世界の息苦しさからのがれ出ようと企てたのである。

なかでもロランのペートル・ヴェンに対する尊敬と傾倒は熱烈なものであった。少年時代からペートル・ヴェンこそは一生を通じて彼の魂の師であった。彼がいくたびかの生の虚無感におそわれた危機に、心の内部に無限の希望の火をともしてくれたものは、ペートル・ヴェンの音楽であった。こういっている。

「親愛なペートル・ヴェン！彼の芸術家としての偉大さについては、すでに多くの人びとがそれ



ブレヴの墓地で

を賞賛した。けれども彼は音楽家中の第一人者であるよりも、さらにはるかに以上のものである。彼は近代芸術の中で最も雄々しい力である。彼は悩み戦っている人びとの最大最善の友である。……そしてわれわれが悪徳と道学とのいずれの側にもある凡俗さに抗しての果てのない、効力の見えぬ戦いのために疲れるときに、このペートル・ヴェンの意志と信仰との大海にひたるとは、いいがたい幸せの賜ものである。彼から勇気と、戦い努力することの幸福と、そして自己の内奥に神を感じていることの酔い心地とが感染して来るのである」（『ペートル・ヴェンの生涯』片山敏彦訳、岩波文庫より）

若い頃から耳を患い、家庭内のトラブルに悩まされながら、強靱な精神力と不屈の闘志で楽聖となった。ロランの研究は見事にこの楽聖の奥深くまで分析し、考証している。

ロマン・ロランの諸作品、とりわけ『ジャン・クリストフ』はペートル・ヴェンの存在なくして描くことのできないものであった。ロランの作品は、従来、フランスよりもむしろ国外で熱心に読まれる面があった。フランスでは平和主義を標榜する行動的な知識人として注目される面があったからである。

しかし、いまではフランスを含めた世界中に文豪としての評価を不動にしている。ロランの作品は偉大なヒューマニストの信仰の告白であり、人間信頼の賛歌といえよう。

島野 盛郎 / しまの・もりお

1932年生まれ。早稲田大学第一文学部仏文科卒業。54年、ダイヤモンド社入社。雑誌記者、出版局デスク等を勤め、現在、フリーライター。「伝記研究会」幹事。主な著書に『夢の中に君がいる一越路吹雪物語』（白水社）、『食を創造した男たち』（ダイヤモンド社）などがある。



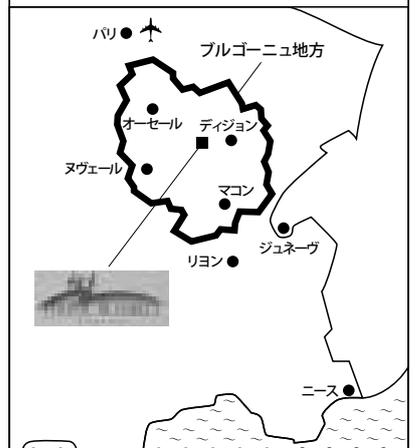
ロマン・ロランの家の前に立つ筆者



Château de Chailly / シヤトー・ドウ・シヤイ

ブルゴーニュへようこそ。

中世がいまだに息づいているブルゴーニュにいらっしやいませんか？数々の銘酒を生み出すぶどう畑、グルメレストランの数々、中世そのままの街並、美しく広がる大地や、小さな村々、豊かな生命力と「はだのぬくもり」を感じる地方、それがブルゴーニュです。



お問い合わせ↓

(株)佐多商会ヴィタリテ事業部 担当：岩沢
Tel. 03 3582 5087